

# 2022年 5月 22日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

## 説教「これでもう三度目」 ヨハネによる福音書 21章1-19節 高橋彰

### イエス、七人の弟子に現れる

21 1 その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。2 シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。3 シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言う。と、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。4 既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分らなかった。5 イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。6 イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。7 イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸 同然だったので、上着をまとって 湖 に飛び込んだ。8 ほかの弟子たちは 魚 のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。

9 さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に 魚 がのせてあり、パンもあった。10 イエスが、「今とった 魚 を何匹か持って来なさい」と言われた。11 シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな 魚 でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。12 イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。13 イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚 も同じようにされた。14 イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに 現れたのは、これでもう三度目である。

### イエスとペトロ

15 食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。16 二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの 羊 の世話をしなさい」と言われた。17 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの 羊 を飼いなさい。18 はっきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締め、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」19 ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

ヨハネ福音書は元来20章30-31節で結びがあるので、21章は後代の付加だろうと研究成果では見なされています。付加の理由は定かではありませんが、主の復活後に誕生した教会の最初のリーダーとなったペトロと、おそらくヨハネ福音書を記し読まれた教会の群れの指導者だったとみられる「イエスの愛しておられた弟子」の最期を知っていた人たちでした。教会の人びとに、弟子たちの働きや教えの多様さや、その関係性を問う思いがあったかもしれません。漁師としてのペトロがここで初めて描かれるのも、またガリラヤの(ティベリアス)湖での復活顕現など、他の福音書の使信との調和がなされているとも見られます。同時に、20章のマリア、トマスに続いて、ペトロに焦点が当てられる仕方で前章までの構成を巧みに引き継いでもいます。その中で「三度目」(14、17節)という言葉で伝えようとしているメッセージに目を留めたいと思います。三度目とはどのような思いにさせられることなのでしょう。使徒パウロは自分に負わされた身体の苦しみから離れさせてほしいと「三度主に願いました」(Ⅱコリ12:8)。幾度も、重ね重ね、十分にとも受け取れます。

復活の主イエスは既に二度も(復活日、翌週)弟子たちに現れました。彼らは鍵のかかった部屋に象徴された、後悔や喪失感、社会的な攻撃による命の危機や孤独の不安からの解放でもありました。ペトロはガリラヤの湖で「わたしは漁に行く」と言います。仲間たちは同行します。一見、元の日常に戻ったとも見えます。一晚収穫はありません。しかし岸に立つイエス(とは最初気づかぬ人)のかけ声で

網に魚がたくさんかかります。そこで初めて弟子たちは主イエスだとわかり、愛弟子は告白し、ペトロは湖に飛び込んでイエスの元に駆けよります。朝の食事は、何度も繰り返されたイエスとの食卓の交わりの記憶を思い起させられ、そこで示され教えられたイエスの愛が弟子たちの心を満たしていきました。もう三度も、さらに何度も、教会はそうにしてイエスが復活され、生きておられ、わたしたちと共にいらっしゃるということを、礼拝と主の晩餐の交わりを行い続けて伝えていきます。ガリラヤの湖での漁はペトロ達の原点、日常でした。しかし復活の主イエスから「平和があるように」と「聖霊を受け」、イエスが「主であることを知った者たちにとっては、これは福音宣教を現わす出来事だとも伝えられてきました。何度も停滞や失敗をしながらも、イエスの言葉を聞いて、人びとの元に出かけて行き、福音を告げ、救いのために網を打ち続けて来たのが教会です。

食事の後、イエスはペトロに特別に問いかけます。「この人たち以上にわたしを愛しているか?」と。ペトロは「はい、主よ」と応答します。三度繰り返されたやりとりはペトロに不安と悲しみも湧きあがらせました。疑念、また十字架前の三度の否認を思い起こさせましたのです。しかしそのペトロにイエスは「わたしの羊を飼いなさい」と託しました。しかもそれは愛するという仕方で、「両手を伸ばして」十字架によって成し遂げられた主イエスがしてくださったような仕方で、であることが伝えられています。